第三章　研究の方法

ここでは、本研究における研究の方法論について論述し、書風分析の方法とそれに関する模索、そしてその経緯について明らかにする。

まず、先行研究に関する調査から『法華義疏』原本の現状を踏まえ、その上で、何を対象として研究を進めたのか、本研究における具体的資料の内容について論述し、更に、資料を運用し、書風分析を行うまでの経過について述べることで、実証的研究における資料精度の意義と重要性を指摘する。

また、研究の動向について論述することで、本研究の方法論の実体と論文構成に至る過程を明らかにする。

第一節　本研究の流れと研究の方法論

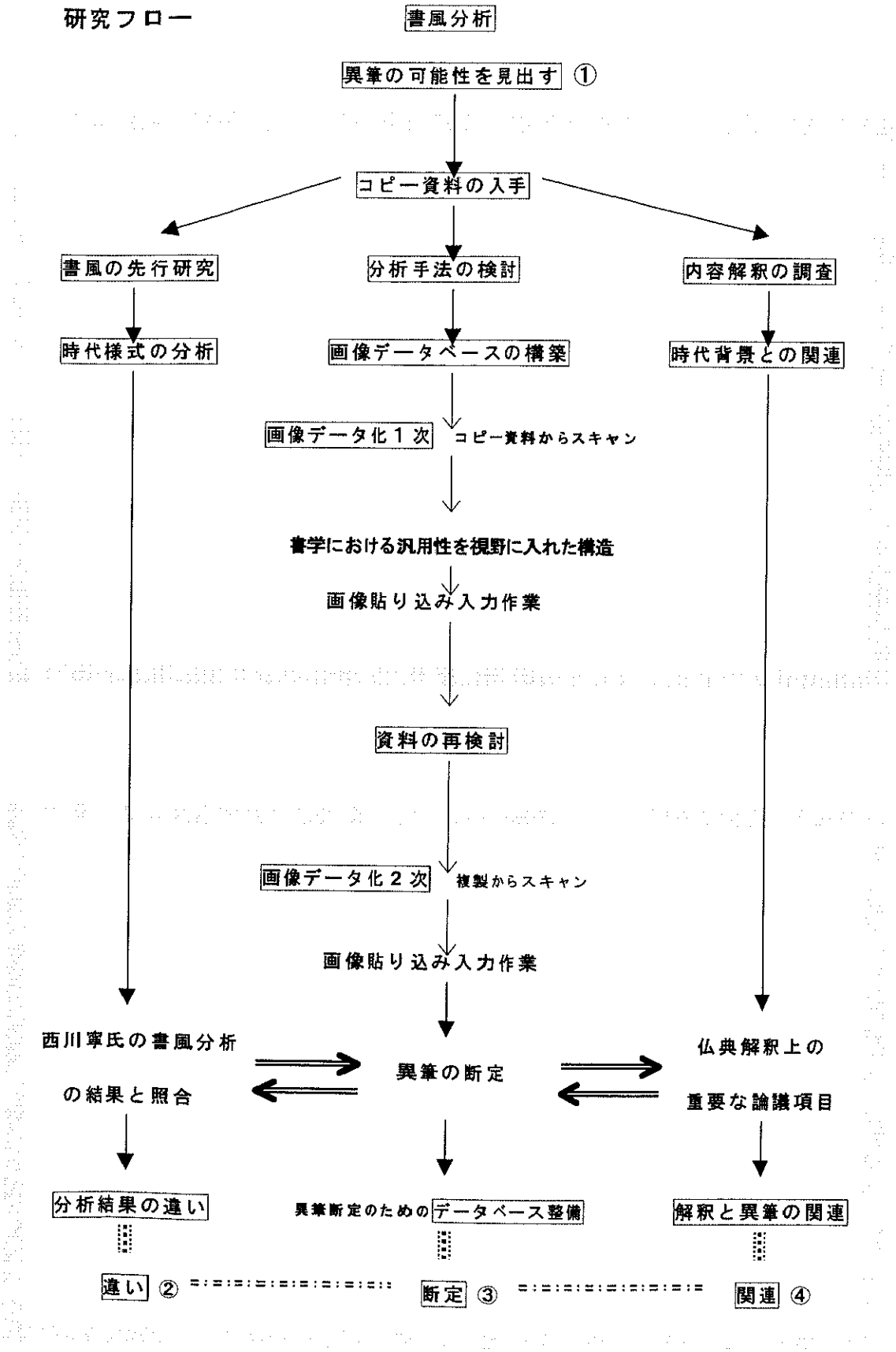
本研究の方法論は、何らかの概念を基底とし、それを敷衍して行ったものなのではなく、『法華義疏』という具体的資料の分析、運用の中から、試行錯誤を行い、その結果、導き出されたものである。

従って、研究方法論の必然性を明らかにするためには、本研究の流れを論述し、試行錯誤の内容を解析する必要があると考える。

ここではまず、本研究の全体をフローにまとめ、次頁に掲載した。

それについて論述を加える。

研究フロー



第一段階

第二段階

分析結果の違いを異筆の可能性として仮説にし、内容との関連から重要性を示唆しつつ、異筆の断定を行う。

② ① ④ ③

論文構成

以上が、本研究全体の研究の推移である。

中心となっているのは、『法華義疏』の書風分析であり、それに伴う資料運用の試行錯誤である。研究フローに示したように、本研究の端緒は、『法華義疏』の中に異筆の可能性を見出したことによる。執筆者以外の別人の筆跡による貼紙が存在するという見識から研究が進められたが、これは、複製の閲覧が起因となった。

本研究では特に、『法華義疏』の中に見られる改訂、補筆、貼紙の箇所に注目し、それに関する書風分析を行うことを目的としている。そしてその中で、円滑な資料運用のための方法について模索し、その結果、画像データベースの構築を試みることにし、多くの時間を費やした。言うまでもなく、研究には、資料を通じての分析が不可欠である。そして、資料の収集範囲と精度の如何は、研究の具体的方向性を決定する重要な項目である。

本研究は、或る時点において「資料の再検討」を行い、資料の精度に関する問題点の改善を図った。しかしそのことで、画像データ化、データベース構築については、大幅な変更を余儀なくされた。資料の精度が研究全体の進捗を大きく左右し、研究の方向性を変えたのである。

これは、本研究における転換点となった。そこで、研究フローにおいて内容を包括し、「資料の再検討」を境に、「第一段階」、「第二段階」としてまとめた。

「第一段階」と「第二段階」は、いずれも、3 つの軸に支えられている。「書風分析」、「書風の先行研究」、「内容解釈の調査」である。

3 つの軸は、初期の段階において、各々問題点を抱えており、その結果、研究全体としてのまとまりに欠け、本研究の視点と意義が明瞭にならなかった。それが、「資料の再検討」により変化した。

次節以降、各々が抱えていた問題点と、「資料の再検討」に伴って行われた解決の方法について論述する。

論述するのは、以下に示す内容である。

調査領域	書風分析		書風の先行研究	内容解釈の調査
詳細	②画像データ化	③データベースの構築		
第一段階	コピー資料から入力	書学における汎用性を目指した構造	時代様式の分析調査	遺品成立の時代背景の調査
第二段階	複製から入力	異筆判断のための構成	先行研究との照合違いの分明	解釈の論議項目と本研究との関連

「第一段階」、「第二段階」共に、調査領域は「書風分析」、「書風の先行研究」、「内容解釈の調査」であり変更がない。しかし表からもわかるように、調査内容は変化しているため、変化したことによってもたらされた研究の深度と方法論の確立について論述を行う。

第二節 対象資料の複製及び画像データ化

(1)『法華義疏』の複製による資料の決定

書風分析を行うためには、研究対象の綿密な調査が欠かせないが、『法華義疏』は現在、宮内庁の所管とされているため、原本から直接、遺品の状態を判断するということは不可能である。

『法華義疏』は、歴史的に貴重な文献資料でありながら、図版等に掲載されているのは、冒頭の一部分に限られている。そこで、四巻全体の現状について知るためには、先行研究の内容を調査するか、または、複製を参照することになる。

本研究の書風分析は、『法華義疏』の複製を基として進められた。

ここでは、『法華義疏』の複製についての概略を述べ、そのことにより、本研究における具体的な研究資料について明らかにする。

『法華義疏』の複製公刊は、二度にわたり行われている。

まず、昭和初年、太子一千三百五年御忌の記念事業として、聖徳太子奉讃会が宮内庁の允許を得てコロタイプ版に付し、世に弘めた[1]ものである。発行部数四百八十部、昭和元年十二月第一回配本、以後二ヶ月おきに配本[2]されている。

二回目は、太子一千三百五十年御忌記念の意味[3]で、約 50 年後、昭和四十六年[4]に複製公刊されたものである。この時は、複製本に付して、解説がつくられた。

「序説・坂本太郎、装潢・石田茂作、内容・花山信勝、書法・西川寧」の四氏が担当している。

---

(1) 坂本太郎「法華義疏解説・序説」(『法華義疏解説』聖徳太子奉讃会、1971 年) 1 頁
(2) 同上 1 頁
(3) 坂本太郎「法華義疏解説・序説」(『法華義疏解説』聖徳太子奉讃会、1971 年) 2 頁
(4) 花山信勝校訳「法華義疏下巻」(『岩波文庫』岩波書店 1976 年) 391 頁

この中で、本研究が対象資料としたのは、昭和元年配本の複製本である。

筑波大学附属図書館に収蔵されている四巻本をもとに研究が進められた。

研究を進めるために資料を探し、或る時、筑波大学附属図書館にて、複製本を閲覧する機会を得た。そして、閲覧の機会を重ねる過程で、四巻の一部に書風が異なると思われる一葉があることを発見した。調査に至る端倪である。

筑波大学附属図書館収蔵の複製本は四巻本であるが、それぞれ図書館収蔵の期日を異にしている。

巻一、昭和2年1月11日編入

巻二、昭和2年6月14日編入

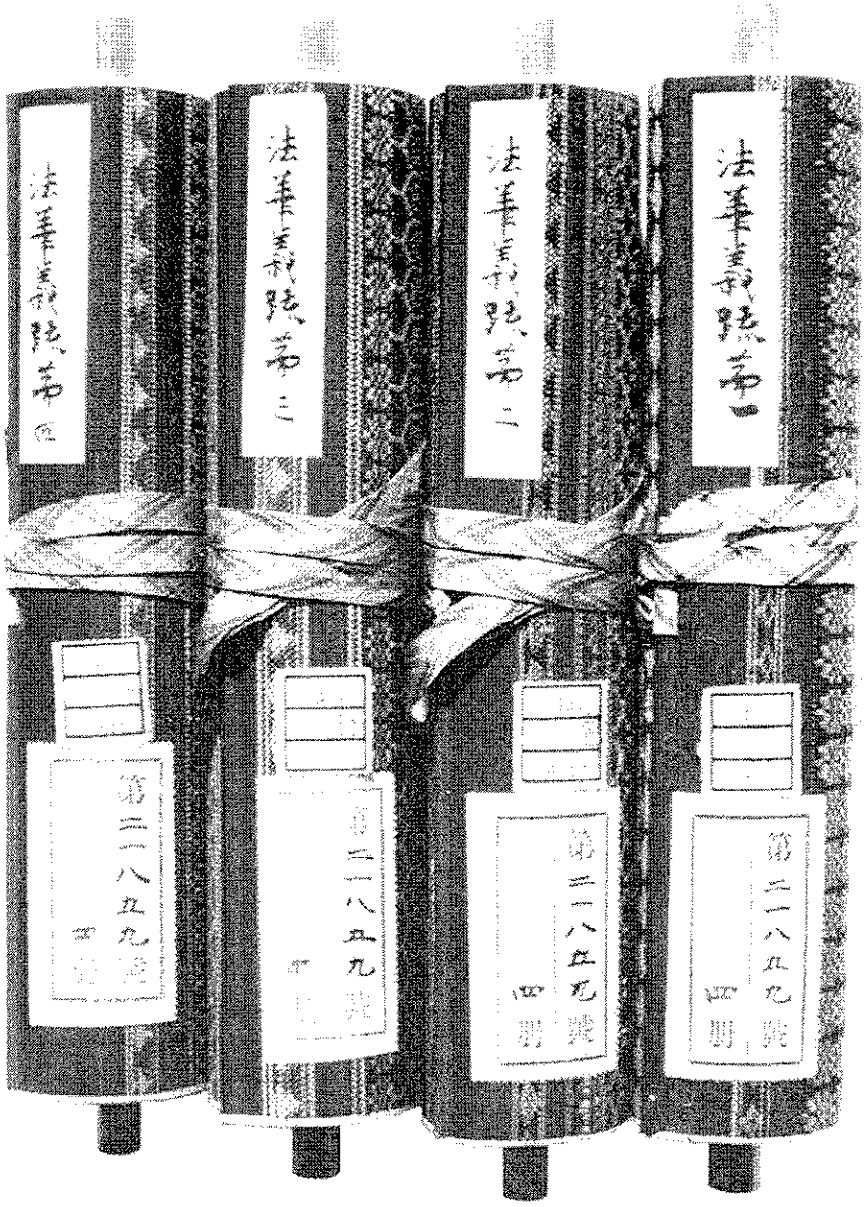
巻三、昭和2年9月13日編入

巻四、昭和3年1月17日編入

以上が、巻子にある題箋から伺える。

ここで次頁に、筑波大学附属図書館収蔵の、昭和元年配本の複製本四巻の外観を掲げる。

『法華義疏』　昭和元年配本の複製本、四巻の外観



筑波大学附属図書館収蔵の複製本に関し、貼り合わせられた紙の大きさをすべて測定し、最初の文字を添えて、一覧表にした。また、編入の期日、割印の記載も併載した。

以下に示す。

巻一	長さ	巻二	長さ	巻三	長さ	巻四	長さ
見返し	25.6	見返し	25.8	見返し	25.1	見返し	25.8
法	43.8	譬	45.8	信	45.1	五	44.6
非	44.4	第	44.5	下	42.2	漢	41.7
尼	45.8	而	44.4	今	45.4	云	42.2
四	43.4	子	42.3	或	44.4	以	44.3
但	36.1	第	43.2	甚	44.8	二	39.1
従	44	中	44.6	言	45	其	38
四	42.3	悪	44.4	二	44.9	壽	30.7
四	42.1	丶	44.6	輿	42.8	就	44.2
此	40.6	熱	44.4	无	43.5	世	43.8
薩	42.9	足	44.3	以	46.6	五	43.1
岩	44.7	機	46.4	使	43.3	要	42.4
偈	42.3	時	44.2	上	46.1	少	42.6
文	42.3	第	46	従	44.6	為	44.5
疑	41.7	人	43.2	死	43.3	中	42.3
亦	42.1	輿	44.6	我	46.7	而	42.3
實	43.7	雖	44.4	是	42.4	四	44.7
義	42.6	漢	46.4	而	44.8	従	41.6
正	44.1	之	44.3	知	44.4	以	42.9
舎	40.8	第	42.7	物	44.4	而	42.3
世	42	結	46.2	趣	41.1	今	43.8
所	40.5	取	45	汝	43	種	42.6
以	42.4	機	43.1	第	41.8	那	43.1
一	40.3	而	43	大	42.4	告	40.5
明	42.5	七	44.6	従	40.8	偈	42.7
戒	42.4	有	44.4	得	42.1	通	43.9
人	42.3	曽	44.6	従	45.6	離	42.7
従	42.8	不	44	見	43	果	41.3
而	40.7	二	44.7	南	41.4	勸	44.5
言	43	九	44.2	二	42.4	通	42.5
従	41.1	此	42.8	乗	41.3	以	42.6
略	42.3	謂	44.1	釋	43.4	有	42.1
无	41.4	勸	43.6	在	41.7	仍	30
大	42.8	善	36.5	車	41.8		
為	20.3			衆	44		
				明	40.6		
				三	19.2		
巻一編入	昭和2年 1月11日	巻二編入	昭和2年 6月14日	巻三編入	昭和2年 9月13日	巻四編入	昭和3年 1月17日
割印	東京高等師範学校図書館	割印	東京高等師範学校図書館	割印	東京高等師範学校・図書	割印	東京高等師範学校・図書

『法華義疏』には、貼紙、切り継ぎといった箇所が散見している。複製の製作にあたっては、これらに対し、配慮がなされたと思われ、紙は 40cm を基準に長さが前後している。本研究の研究対象である複製の継ぎ目には、すべて「東京高等師範学校図書館」、「東京高等師範学校・図書」の割印が押されている。

複製には、原本に存在するような紙色の違いは見られず、印刷されていない。従って、複製本から紙色を確認することはできない。

筑波大学附属図書館にて、複製本の閲覧を重ねていたが、複製本は本来、貸出が許されていないため、資料としての利用に制約があり、研究方法に問題が生じていた。仮に、異筆の可能性を見出したとしても、資料の入手が困難であれば、資料を提示しての実証的論述が行えず、研究として成立することが不可能になる。

そうした中、筑波大学附属図書館よりコピーを通じての複写許可があり、研究方法に関する大きな進展が見られた。複製からのコピー資料という状態ではあったが、これにより、研究方法に関する新たな模索を行うことができた。

次に、本研究が行った模索に関して論述し、研究方法論の構築までの過程を明らかにする。

(2)画像データ化

A コピー資料からの入力

筑波大学附属図書館より、複製からのコピー許可が下り、コピー資料という状態ではあったが、これを入手したことにより、実質的な文字の比較による書風分析が可能となった。

比較にあたり、まず問題となったのは、『法華義疏』の文字数であり、それに伴う分析の方法である。『法華義疏』は四巻でほぼ十万字という膨大な文字資料群である。これまでのようなコピー資料を切り貼りして運用するという研究方法には限界がある。そこで、文字資料を画像データ化して収録運用するデータベースの構築を試みることにした。『法華義疏』はこの中で、画像データとして変換、入力され、運用されることになる。画像データ化はデータベースを支える要諦、主要データの入力である。

本研究の『法華義疏』画像データ化の「第一段階」は、コピー資料からの入力となった。

コピーは、複写の手段として、現在最も一般的な方法とされている。しかし、画像資料として入力することを考えた場合には、非常に精度の低いものであると言わざるを得ない。コピー機を通し、一旦精度が低くなってしまうと、画像データ化に際して精度を高くしても元に戻らず、そればかりか、むしろ輪郭線が補正され、そのことで更に印象の違うものになってしまう[5]。従って、画像データ化においては、精度を上げることに有効性がなく、本研究においては、低いままの状態で入力を行うことに決定した。

---

(5) 補論 第三節 画像データ化 (1)コピー資料からの画像データ化 248～249頁

精度が低いため、しかし、データ量は少なくなる。データベース収録を想定した場合にも、処理速度に関する問題が生じにくく、多くのデータを収録できるという利点もある。画像データの入力は、スキャナを使用し、データベース構築の進捗状況に合わせて、同時平行的に行われた。そしてそれに伴い、データベースへの画像の貼り込み作業を随時行った。

そうした状況の中、本文より小さい文字で書かれた補筆の箇所を、データベースに貼り込むに至り、この時、画像データの精度の低さが文字の拡大により強調され、資料の再検討の必要性に迫られた。本研究のデータベースは、その構造上、画像データの貼り込みに際し、任意の拡大が行われる。その結果、本文よりも小さな文字は拡大率が高まり、積み木を重ねたような輪郭線の段差が、露わとなったのである[6]。

『法華義疏』本文を基準に考えれば、小さな文字の不明瞭なデータは、容認する以外にない。しかし、本研究の目的は『法華義疏』の異筆判断にある。異筆は、修正、補筆、貼紙の中に存在しており、その中には、本文より小さな文字もある。従って、そのことを再確認したのならば、小さな文字の不明瞭なデータを、放置することはできない。解決策は、資料の再検討以外にない、ということになる。

このような状況下にあり、資料の再検討を諮る中、やがて、筑波大学附属図書館より複製の複写許可が得られた。これにより、複製から直接スキャナで画像入力するという研究の大きな進展が生じた。

研究フローに示した「第二段階」であり、ここに至り、画像データ化に関する新たな試行錯誤が開始された。

---

(6) 補論 第三節 画像データ化 (1)コピー資料からの画像データ化 247～248頁

B 複製からの入力

複製からの入力は、資料的価値が高まることを意味する。しかし、精度が高まるために、細部の情報が増し、データ量は大きくなる。データベースに収録した場合、運用には、処理速度、バックアップを含め、幾つかの検討課題が生じた。研究支援が得られず、研究環境に資金面、技術面の制限がある中で、実現可能な画像データ化への試行錯誤を経て[7]、データ入力を行った。

本研究の『法華義疏』画像データ化は、資料的価値を最大限に発揮させるための資料保存的なものではなく、データベースに貼り込むことを想定している。データベースの処理速度、バックアップを含め、運用を視野に入れたものである。従って、複数のハードウェアの相関的な環境が画像データ化に大きく影響した[8]。

『法華義疏』は灰褐色の紙色をしている。そして、改訂を施された貼紙には、白色の紙の部分があり、これは先行研究に明らかである。本研究は、改補修正貼紙の箇所に関する書風分析を、第一の目的としているため、複製が紙の色を忠実に表現しているならば、画像データ化においてもそれを反映させる必要がある。しかし、複製には、それが反映されていない。そこで、画像データ化は、カラーデータではなく、白黒データとして入力した[9]。

複製からの直接入力となったことにより、画像データの精度が高まり、修正によって書かれた、小さな文字の入力に対する輪郭線の問題も解消

---

(7) 補論 第三節 画像データ化、(2)、(3)、(4)

(8) 補論 第二節 画像データ化 (4) 261 頁、(6) 267 頁　第一節 ハードウェア構成 219 頁

(9) 補論 第三節 画像データ化 (3)カラー写真モードは、高精度に対しての試行錯誤であり、色彩に関するものではない。

された。画像データ化の設定が定まるまで、実に様々な試行錯誤を行ったが、そのことにより『法華義疏』内部に視点が集中し、より厳密な分析を行う必要性があると感じた。

画像データ化と雖も、資料の精度に関する問題であり、実証的研究においてはやはり、資料の精度が研究の方向を左右する重要な項目である。データベースという技術においても原則は同じである。

書風分析は、画像データ化の試行錯誤が要因となり、データベースの構造に改編を加えることになった。「第二段階」は、「第一段階」のような「書学における汎用性を視野に入れた構造」ではなく、異筆断定のためのデータベース整備を行うという方向性が決まった。研究フローに示したように、「異筆の可能性を見出す」という本研究の出発点と対応する形のデータベース構造を目指すこととなった。

第三節 データベース構築

(1)書学における汎用性を視野に入れたデータベース構築

データベースの構築は、『法華義疏』の書風分析を支える中心の研究課題である。円滑な資料整理の具体的手段として、データベース構築を試み、研究環境の改善を計った。

まず、現在の書学におけるコンピュータの利用状況を鑑み、画像データベースの構築は、書学において先駆的な意味を持つことから、汎用的な構造を持つデータベースの構築が必要であるのではないかと考えた。

研究フローに示すように、「第一段階」は、複製からのコピー資料という状態の中で、データベースの構築を進めた。この段階においては、画像データの精度が低く、従って、多くの資料を収録できるため、広い範囲の資料収録を想定できた。『法華義疏』の書風分析については、「時代様式の分析」を考えており、比較対象となる遺品のデータを収録するための構造を視野に入れていた。

そこで、「書学における汎用性を視野に入れたデータベース構築」の中に、『法華義疏』の時代様式に関する書風分析を、同時に包括する方法がないか、検討した。書学において、研究者が広く利用できるデータベースを目指し、データの並べ替えを随時設定し、抽出項目を増やすことのできる構造を組み込んだ(10)。

また、『法華義疏』の時代策定の判断に必要なデータ構造を基本に考え、「有紀年」、「筆者」、「地域名」といった情報構造を組み込んだ(11)。

書風の比較分析は、『法華義疏』が歴史的に比定されている飛鳥時代

---

(10) 拙稿「書学における書跡文字画像データベースの構築」(『芸術学研究第一号』、筑波大学芸術学研究科、1998年) 26頁

(11) 同上 27頁

を中心に、中国、朝鮮半島の広い範囲にわたる遺品が対象となる。しかし、対象地域となる朝鮮半島には、現存遺品が少なく、また、史学において議論が重ねられているように、当時の情勢は混沌としている。遺品の内容を情報化するには、課題が山積していた。

更に、汎用性を視野に入れた場合、この他にも多くの問題が存在している。それは、以下に代表されるような内容である。

①画像データの拡大率、縮小率。

②連綿の長さ、一文字の範囲設定。

③紙面の中の位置、構成。

④紙の色。

これらは、データベース構築の課題である以前に、書学の研究方法論に関する課題である。

例えば、データベースに文字資料を画像データとして収録する場合、一文字ずつ区切り、範囲を設定して収録することが基本となる。文字と文字が繋がり、連綿しているものは、どこかで区切らなければならない。しかし、連綿の長さを一文字の範囲として区切るには、何らかの意図、設定の概念がなければ不可能である。紙面構成に関しても、何を中心に、どこまでの範囲で、どのように情報化するのか、それがそのまま、遺品各々の解釈に繋がる。解釈の結果、別のデータが必要となる可能性もある。それらはすべて何らかの知見、研究の方法論に直結していく問題である。具体的内容がなければ、データベースの設定ができず、また、先に設定をしなければ、汎用性として構造化できないという矛盾を孕んでいる。

つまり、汎用性を求めれば、データは表層の集積に終始し、それぞれの資料が持つ実状からは遠ざかってしまう。構造が堅固になり、広範な

領域を包括するようになるほど、データベースは形骸化し、柔軟な運用からは違背していく。実質的な運用のためのツールであるはずの、データベース本来の意義が見失われてしまうことになる。

このように、「第一段階」においては、収録する対象範囲が定まらず、そのことにより、データベースの機能が明確にならなかった。

(2)異筆断定のための「法華義疏画像データベース」構築

研究フローに示すように、研究の進行の中で、或る時「資料の再検討」を行い、その結果、複製からの直接入力が可能となった。「第二段階」における画像データ化の試行錯誤[12]は、主要データの変更であり、データベースの根幹に関わる大きな課題である。

しかしこの段階になり、『法華義疏』内部の書風に視点が集中したことで、書風分析の内容、すなわち、データベース構築の方向性が改めて明確になった。収録するデータの範囲が決まったことにより、構造化する情報の範囲が設定可能となったのである。

その結果、「第一段階」の「書学における汎用性を視野に入れたデータベース構築」の際に抱えていた問題点から少なからず開放された。これは、『法華義疏』という遺品の特性によるものである。

その内容を以下に挙げる。

①画像データの拡大率…本研究においてはデータベースの構造上、画像の正確な拡大率を設定できない。しかしながら『法華義疏』は、一文字の大きさが 1cm 前後であるため、ディスプレイ上においても印刷においても原本から掛け離れたものにならない。

②連綿…『法華義疏』は、単体で書かれており、連綿が見られない。従って、一文字ずつ区切って画像登録しても問題が生じない。

③位置…『法華義疏』は註釈書であり、芸術性を強く意識して書かれたものではないため、空間構成が重要な判断材料とならない。

④紙の色…画像データ化の対象となった『法華義疏』の複製には、紙色の違いが印刷されていないため、情報化できない。画像は、カラーで

---

(12) 補論 第三節 画像データ化、(2)、(3)、(4)

はなく、白黒データとして入力し、データ容量を抑えた。

これらの特性からわかるように、『法華義疏』は他の遺品に比べ、一文字ずつ切り離してデータベースに収録しても、原本の状態を損なう程度が比較的少なくて済む。データベース収録は、『法華義疏』書風分析のためのツールとして有効に機能するということが期待された。

「第二段階」における書風分析は、画像データをデータベースに貼り込みながら、これと同時並行で行っていった。

本来、書風の分析は、遺品に多く触れることで時間を費やし、或る時突然、何らかの特徴が看取されるという性質のものである。遺品に多く触れるという面から考えれば、画像入力、データベースへの貼り込みも何等変わりはない。単調な作業の中から、見出されるものも多い。そうした発見の内容を、データベースにフィードバックさせ、更に分析を重ねるという必要がある。そこで、そのプロセスをデータベースの構造として組み込み、データの中に加えた[13]。

これは、仮説と論証という、本研究の分析手法をデータベースに組み込み、構造化したものでもある。書風の分析に対し、データの並べ替えを行うことで分析し、論証の手立てとするものである。

「第二段階」の成果としてデータベースが整備された時、本研究におけるデータベース構築の意義が明らかになった。本研究において構築した画像データベースは、書学における汎用性を目指したものではなく、『法華義疏』の異筆を分析するための具体的なツールである。

汎用性を求めた場合は、対象世界のすべてを包括することが目的とな

---

(13) 補論 第2節 データ構造 226～228頁、241～243頁

るため、データベース設計に先行し、概念構築が優先される。データベース構築に対する、実現可能性の有無にかかわらず、概念設計は独立して行うことができる。しかし、運用を重視し、データベースが有効なツールとなるためには、個々の研究対象に対する洞察が必要であり、解釈の深度と共に、データベースが進化する必要がある。現在の状況下においては、データベース構築の際のプログラミング等、容易ならざる点も多い。技術面、資金面に関する何らかのサポートが得られるか、もしくは今後、データベースが進化し、更に構築の自由度が増すか、いずれかが求められよう。

運用を重視したデータベースとは、汎用性とは相反するものである。データベースという技術は、既に耳慣れた言葉になりつつあるが、運用という本来の意義の上からどれほどの利用がなされているのか、未知数である。

本研究においては、「法華義疏画像データベース」を構築し、異筆断定のための研究環境を整えた。それはまた、研究方法論についての模索であり、同時にデータベース構築の意義についての考察となった。

そして更に言えば、それらを左右する最も重要な要点が、画像データ化に伴う、資料の入手とその精度に関する問題であるという結論に達した。

第四節　文献解釈

研究フローにおける 3 つの軸の一つに『法華義疏』の「内容解釈の調査」がある。書かれた内容について調査することは、『法華義疏』という遺品についての理解を深めることである。

(1)歴史的背景としての文献資料

『法華義疏』は、歴史的に貴重な文献資料として、その価値を高く認められている。伝称筆者である聖徳太子との関連を始めとし、多くの議論が重ねられている。これまでの書学における論文では、多面的傍証をどれだけ多く重ねるかが、論文の課題とされてきており、研究対象に関する解説を各方向から検討し、遺漏がないということが、目標とされた。

「第一段階」においては、『法華義疏』という遺品の広がりを包括した形で、歴史的背景に関する調査を行った。そして、その調査の中から、本研究の位置づけを明確にしたいと考えていた。この段階では、本研究の中枢である書風分析において、時代様式の分析を視野に入れていたため、遺品の時代背景に関する広い調査は不可欠となっていた。

しかし、伝説的とも言われる聖徳太子の実像を含め、調査を重ねる度に懐疑が深まり、原本に対する理解からは離反していく。これは、論を進める中で、実証的研究の資料として堪えうる、信頼性のある文献であるか否かについて議論が絶えず、その証明のために、更に広範な領域からの資料が必要になるという論文の構造が背景にあるためであると思われた。各方面において諸説があり、紛々として定まらず、また、どの領域から調査を行うかにより、論述は全く異質なものとなるという問題を抱えていた。

(2)解釈の重要部分と異筆との関連

「第二段階」に至り、書風分析の内容に関する大幅な変更が行われ、原本の解析は、時代様式から異筆分類へと変化した。『法華義疏』に書かれた内容に関しても、文献としての歴史的重要性から、異筆との関連における仏典解釈へと重点が変化した。

「第一段階」においては、文献の信頼性を含めて様々な議論が絶えないため、調査することで却って、原本に対する理解から乖離していくという現状があった。「第二段階」になり、異筆の箇所についての解釈と論述内容を改めて精査し直した。

本研究において異筆であると判断する箇所は、改訂、貼紙といった修正部分に深く関連している。『法華経』本文の校定、字句の異同に関する修正、または註釈の重要箇所、何らかの理由なくして、これらの修正が行われたとは考えにくい。『法華義疏』という遺品においてはむしろ、様々な観点から重要であるが故に、敢えて修正が加えられたのではあるまいか。そこで、異筆の箇所の内容を調査した。

その結果、本研究において異筆であると判断される箇所は、同時に、『法華義疏』解釈の重要部分であることが判明した。異筆であるか否かを判断することは、書風分析ばかりでなく、解釈にも影響を与えることになり、密接な関連性が存在することが明らかとなった。これは、本研究が掲げた研究の目的の一つであり、研究方法論の展開に相当する。

書学が研究対象としている文字は本来、言語的機能という側面と、線を使って表現される抽象的造形表現の側面という、二つの側面がある。これらは、文字を媒体にした別々の機能でありながら、二律背反するものではないはずである。しかしながらこれまでは、文字を中心に多面的傍証という形で論述が行われてきており、二つが有機的な関連性を持っ

たまま論述されるということはなかった。文字の機能という面から考えれば、関連の構造が存在することは容易に想像できるが、しかし、具体的事象を通しての提示がなければ、一つの研究方法論として確立することはできない。

本研究では、『法華義疏』における異筆の分類という研究課題を通し、書風分析と内容解釈との関連性を解析した。これを書学における新たな研究方法論の提示にしたいと考えている。これは、「第二段階」に至り、画像データ化の試行錯誤等、『法華義疏』内部に視点が集中したことで、もたらされた成果に他ならない。

本論の構成の中では、「第一段階」において行った調査の内容を、第二章に概略としてまとめ、「第二段階」において明らかになった書風分析と内容解釈との関連を、第五章に仏典解釈の重要部分を論ずることで明示した。

第五節 書風の先行研究

本研究の目的である『法華義疏』の書風分析にあたり、書学における研究動向を明らかにする必要があると考え、先行研究に関する調査を行った。

(1)先行研究の調査

書風に関する先行研究の多くは、当時の文化背景を基準にし、時代様式の印象を大略的に論述したものである。具体的な文字例を示しての論述は少なく、『法華義疏』は、日本書道史において重要な遺品であると認識されながらも、活発な議論が行われてきていないという現状を示していた。

書風に関する先行研究の多くが、時代様式の印象を論述したものであるのに対し、西川寧氏の論考には、具体的な文字例を示しての詳細な論述がある。その中において西川氏は、『法華義疏』を隋文化圏のものであると判断しており、他の先行研究とは解釈を異にしていた。

「異筆の可能性を見出す」ということが本研究の出発点ではあったが、「第一段階」においては、『法華義疏』の時代策定を視野に入れ、研究を進めていた。『法華義疏』は、四巻全体を通して書風に変化がなく、一貫性が見られるため、データベースを使用し、書風を整理することが容易であると考えていた。

(2)先行研究の応用と仮説の設定

「第二段階」において、書風分析の方向性が変わり、時代様式の分析から異筆判断へと変化した。書風に関する先行研究には、時代様式の分析と同様、異筆の分明に関する論述もまた少ない。

異筆の有無については、本研究において異筆であると判断する箇所が、先行研究において異筆でないと論じられている場合もあり、検討の必要があると思われた。具体的には、第二章において紙色との関連から論述した、白色紙の部分である。

そこで、「第二段階」において行っていたデータベースへの貼り込み作業を、巻一の画像データ収録後、巻二、巻三と進まずに、巻四へと進めた。異筆の可能性のある箇所、すなわち白色紙の部分が巻四に集中しているためである。特に、巻四第六紙については、花山信勝氏、石田茂作氏に「本人の清書」とする説があるが、本研究においては異筆であると判断している。

書風分析は、データベースへの画像貼り込みを行う過程の中で、随時行っていた。並べ替えをし、文字ごとに検索し、一覧表示して検討したのである。その結果、本研究の出発点である「異筆の可能性」を裏付けるような差異が明らかとなった。

更に、この結果を先行研究と照合するため、西川寧氏の論考内容と比較した。先行研究において、文字例を示した詳細な書風分析が見られるのは、唯一西川寧氏の論考のみである。比較を行ってみると、本研究において異筆であると判断する箇所は、西川氏の分析結果に一致しなかった。西川氏の論考は、巻一のみを対象にしている。従って、西川氏の分析結果と巻四第六紙の内容が異なることは、可能性として有り得ないことではなかった。

そこで、本研究における異筆の断定内容と西川寧氏の分析結果との隔たりを「仮説」として扱い、論証のための立脚点とした。また、仮説を中心に論文の構成を整えることで、本研究における書風分析の意義を明確にすると共に、第一章で述べた研究目的の一つを達成した。このような仮説立証型の論文構成は、書学において見られない手法である。本研究は、研究の手法を論文の形式として定着させることで、研究方法論として確立させた。

データベースに収録されたデータの内、巻一における画像一覧の集計結果は、悉く西川寧氏の分析結果と等しいことが判明した。これは、『法華義疏』の書風がもたらす一貫性によるものであり、巻一に対して分析を行った西川寧氏の論述を証左するものである。このことにより、本研究における異筆判断の比較対象、データベース収録のデータ範囲を定めることができた。

第六節 研究アプローチの相互関係

「第一段階」においては、「コピー資料の入手」から、研究アプローチの3つの軸が派生している。1つの項目から派生している問題にもかかわらず、追求をしていくと、それぞれが広範な領域を所有していることが明らかになった。この段階において論文の形式を整えるためには、3つの軸のどこか一方に比重を置いた形で、研究目的である書風分析へと帰着させる以外にはなく、具体的には、以下の内容が考えられた。

「第一段階」における研究アプローチ

書風分析 画像データベースの構築と新たな研究方法論の確立。

内容解釈の調査 文献考証によって行う歴史的経緯の中の位置づけ。

書風の先行研究 書風分析による様式判断と遺品の時代策定。

しかし、どの項目を主軸として選択しても、内容の拡散が避けられず、研究進行の収束が見えないという状況にあった。研究アプローチ相互の関連性は希薄となり、その結果、却って研究の出発点である「異筆の可能性を見出す」ということとの繋がりが不明瞭になるという状態にあった。

「第二段階」は、「資料の再検討」を行ったことにより、研究全体の内容が変革された。研究アプローチ3つの軸がそれぞれ持っている、広範な領域を網羅することはできなくなったが、論点が絞られたことにより、相互の結びつきは、むしろ不可分なものとなった。これら相互の結びつきを、研究フローにおいて記号に置き換え、3つの軸を行き来する矢印として表現した。更に、このような研究アプローチの相互関連の内容を統合させ、論文構成に反映させることで、構造を明確に示した。

論文構成の骨格は以下に示すものである。

書風の先行研究を調査することで、本研究との違いを異筆の可能性として仮説にし、内容解釈との関連から本研究の重要性を示唆しつつ、異筆の断定を行う。

このことにより、「第二段階」における研究アプローチの内容が改めて明確になり、その結果、論文の構成は論文の主旨に従い、必要且つ十分な形で整えられるものであるという、本来の形式を整えることが可能となった。論文は、仮説立証型の構成を整えることとなった。

仮説 ＝ 書風の先行研究と本研究との違い

論証 ＝ 異筆の断定

「第二段階」における研究アプローチ

書風の先行研究 本研究との違いを明らかにすることで仮説の設定を行う。

内容解釈の調査 解釈の重要部分と異筆断定との関連を明らかにする。

書風分析 構築されたデータベースの運用により、異筆の断定を行う。

「第二段階」における研究アプローチの内容は、本論の中で、『書風の先行研究」第四章、「内容解釈の調査」第五章、「書風分析」第六章、に各々論述する。

「第一段階」における研究アプローチの内容については、「書風の先行研究」の時代様式を第四章に包括して論述し、「内容解釈の調査」の時代背景を遺品の概略として第二章にまとめた。尚、「書風分析」の時

代策定は、異筆断定の後の課題として譲る。異筆の断定は、『法華義疏』の時代策定を行う上での、基礎的な研究になると思われる。また、時代策定を行うに向けて、何らかの論点、条件課題となる事項が看取されたため、本論中に併せて附記した。これは、異筆断定を行う範囲の中で導き出されたものであり、第六章 第二節 (3)西川寧氏の時代策定に対する考察、第六章 第五節 『法華義疏』本文と巻四第六紙に見られる類似点 が該当する。

ここまで、本研究の研究方法論について論述するために、まず研究フローを示し、3つの軸の研究アプローチについて、各々を「第一段階」と「第二段階」に分け、内容の変化について論述した。

本研究の研究方法論は、『法華義疏』という遺品の分析から生じたものであり、研究を進行させていく中で試行錯誤し、その結果得られたものである。具体的対象に取り組む中で獲得したものであり、「資料の再検討」とそれに伴う資料精度の高まりを境として、本研究の方法論が明確にその姿を現わしたということからも、このことが推察できる。実証的研究においては、資料精度の如何が研究の深度と方向を左右する最も重要な点である。本研究の目的である新たな方法論の確立を通し、資料の重要性が改めて浮き彫りとなったと言える。